

# potter\_s

大分県立  
芸術文化  
短期大学

OITA  
PREFECTURAL  
COLLEGE OF  
ARTS  
AND CULTURE

久保木眞人と若手陶芸家たち



2月15日(金)～2月20日(水)

10:00-18:00 (入館は17:30まで)

2月18日(月) 休館日 ※研修室入場無料

大分市美術館 研修室



大分県立芸術文化短期大学  
教授 久保木 真人

1952年 千葉県生まれ  
1975年 京都市立芸術大学美術学部卒業  
1977年 京都市立芸術大学美術専攻科修了  
同年大分県立芸術短期大学助手講師、助教授を経て  
2007年大分県立芸術文化短期大学教授  
日本陶磁器デザイン協会展、おおい現代彫刻展、大分県美術展  
EMON展、8の会展などに出品  
個展(京都 大分)

大分県立芸術短大が芸術文化短大に改称し、デザイン専攻に工芸デザイン分野を設けたのは1992年4月である。それまで美術科の中に、定員75名の生活芸術専攻があった。1989(平成元)年、県は芸術短大将来構想懇話会を発足させ、学内あるいは卒業生らの間では、いよいよ4年制大学への取り組みのスタートかと期待が高まったが、出された答申は人文系学科の増設を先行させよ、とするものであった。人文系学科が県内子女の進学先として設けられるなら、生活芸術専攻の設立当初の存在意義は半減するため、デザイン専攻の一分

野へと変更することになった。内容はかつての5分野から染色・陶芸の2分野に絞り、学生は主たる分野の実習に専念することとした。その後、工芸デザインを生活造形デザインと改称して今日に至っている。学生数は減ったが、美術専攻(絵画・彫刻)やビジュアルデザインと同様に、染色あるいは陶芸という分野の勉学を積み上げる環境が整った。わたしも、今まで触れられなかった技術について説明したり、多くの陶芸家の作品や生活をビデオで紹介したりできるようになった。ところが、生活芸術時代に比べより高い専門性を身につけたはずの卒業生が、なかなか

その道に進むことが出来ない。何より専門分野の求人がない。個人作家への弟子入りなども難しい。バブル経済が崩壊し、のちに「失われた10年」「失われた20年」と呼ばれる時代が始まっていたのだ。企業の受け入れが難しければ、自分で工房を立ち上げるという手段があるが、短大を出てすぐに、確実な見通しもなく大きな設備投資を行うことは簡単ではない。昨今、大学で身につけた技術や知識を発揮する道として、企業への就職だけでなく自ら会社を興すこともできるとされ、起業支援の仕組みも増えている。芸術の世界でもそのようなものが必要なのかも

知れない。野津町(現・臼杵市)から「町の特産品づくりのために立ち上げた陶芸工房の後継者を探している」という話をいただいたのは、わたし自身がそのような問題意識を抱え始めたときだった。今回出品している新井君や坂本さんは、いわば野津の第1期生である。栗原さんは門司港アート村で修業した。小川さんや山田君は、竹田市と芸短が協定を結んで運営する直入町の「竹田キャンパス」の設備施設を利用している。もちろん、自宅に窯を築いた人もいて、陶芸を生業とする人を陶芸家と呼ぶなら、わたしを含め出品者のうち何人が陶芸家なのか、微

妙なところではある。けれど、苦しい時期を乗り越えようと努力を続ける仲間であることに違いはない。今年4月、デザイン専攻は内部をビジュアル・プロダクト・メディアの3コースとし、「工芸デザイン」「生活造形デザイン」という名称は消える。名称あるいは内容は違っても、これからデザインやアートの世界に踏み込もうとする若者たち、社会に向かって一歩踏み出そうとする人たちに幸多かれと願わずにはられない。



新井 真之 Arai Masayuki



廣吉 真理子 Hiroyoshi Mariko



小川 陽子 Ogawa Yoko



松田 昭子 Matsuda Akiko



松元 桜子 Matsumoto Sakurako

若竹 良一 Wakatake Ryouichi



佐々木 久仁子 Sasaki Kuniko



牧瀬 千恵美 Makise Chiemi



山田 俊吾 Yamada Shungo



佐々木 優季 Sasaki Yuki



相良 麻友 Sagara Mayu



谷口 能隆 Taniguchi Yoshitaka



栗原 菜美 Kurihara Nami



眞砂 眞砂子 Masago Masako



近藤 絵里奈 Kondou Erina



猪頭 佑衣 Itoh Yui



川合 風望 Kawai Fumi

## 久保木先生のご退職に寄せて

大分県立芸術文化短期大学  
学長 中山 欽吾

久保木先生は、優れた教育者であり、実践者である。学生の陶芸作品を見ると、個性溢れる作品が多く、それでいて作品自体に気品とでも言える上品さがある。このような共通するイメージは、まず教育に当たった先生の哲学が学生に植え込まれた結果だと考えても間違いはないと思う。定年を待たずに退職を決意されたのは残念である。

先生がご退職された後、今まで先生が学外で率先してやられていた仕事、つまり地元大分県の美術界に対する貢献を誰が継いでくれるか、対応が急がれる。というのも、展覧会一つ取り上げても、関係者全員の参画と奉仕活動が不可欠で、久保木先生がこうした県の美術協会の活動に積極的に参加され、リーダーの一人として信頼されていることの意味合

いは重要である。県内在住の芸術家達は、教育者およびその出身者が多く、協会の先生が芸短を高く評価すれば、その教えを受けた多くの教え子が芸短を目指す有力な動機となる。立場上そのような人達とお会いすることが多い私には、県内にある芸術短大として、問題の重要性を感じていた。私は本学に着任して以来、各学科の内容を「経営」という視点から観察してきた。そもそも芸術系の学科は、「卒業」と「就職」といった単純な出口管理には割り切りができない一面を持ち、またそれが当たり前だと空気が感じられる一方で、卒業しても

何を糧に食べていくのかといったはっきりとした動機付けは、行われているようには見えなかった。その意味からは県内に就職面で大きな受け皿のない陶芸は、職業人を養成するには問題があったかもしれない、そうした問題意識が久保木先生を、学外活動に向かわせたのかもしれない。デザイン部門の大幅な再編は、こうした問題意識の下、教養教育的な側面を持つ生活造形をいう言葉はその使命を終えたことになる。時代は変わり、斬新なデザインによって商品や販売手段の付加価値を上げていくのが当たり前の社会となり、デザインを重視して学ぶ学生達

には、この目的に対してよりの確かな専門教育を施す必要性が高まっている一方で、陶芸や染色は人の感性を伸ばし、生活の質を高める大きな役割があることを再評価し、むしろ社会に出た後で、学び直す機会として提供できる生涯学習で重要な位置を占めると考えている。そのような大きな流れの中で久保木先生には、下竹田のサテライトキャンパスを含めて、広く陶芸の楽しみを一般市民に植え付けていく仕事の先頭に立って頂きたかった。今は先生の新天地でのご活躍を祈るのみである。

伊藤 三賀 Ito Mika  
中山 英二 Nakayama Eiji

山田 友里香 Yamada Yurika  
江島 成人 Ejima Naruhito

# potter's OPENING EVENT

ギャラリートーク  
大分から考える陶芸

2月15日(金) 16:30~17:30  
Moderator: 若竹 良一 (大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師)  
谷口 能隆 (大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師)  
会場: 大分市美術館 研修室 ※無料

大分県立  
芸術文化  
短期大学  
OITA  
PREFECTURAL  
COLLEGE OF  
ARTS  
AND CULTURE

# potter\_s

Kuboki, M. and young potter

2013.2.15(Fri)-20(Wed)  
10:00-18:00  
(Admission until 17:30)

2.18(mon)Closed

GALLERY TALK  
2013.2.15(Fri)  
16:30-17:30

OITA ART MUSEUM

OITA PREFECTURAL COLLEGE OF ARTS AND CULTURE



大分市美術館  
〒870-0835 大分市大字上野865番地  
TEL 097-554-5800 (代表)

[主催]  
大分県立芸術文化短期大学  
potter\_s 実行委員会

〒870-0833  
大分県大分市上野丘東1番11号  
TEL 097-545-0542 (於保研究室)

大分県立  
芸術文化  
短期大学

OITA  
PREFECTURAL  
COLLEGE OF  
ARTS  
AND CULTURE